

29-1113 W113-1

食道癌患者に対する放射線化学療法施行後の効果予測因子の検討

○鈴木 絢子¹, 向後 麻里¹, 金子 和弘², 井廻 道夫², 木内 祐二¹ (1昭和大学薬学部 病態生理学,²昭和大学医学部 第二内科学)

【目的】近年, Stage II - III の食道癌患者に対する放射線化学療法(CRT, 5-FU /白金製剤)は約 70%の CR が報告され, 外科治療と同等の効果を示す. そのため, CRT が広く施行されるようになってきているが, CRT の効果を予測する臨床的な因子についてはほとんど検討されていない. そこで今回は食道癌患者における CRT の効果と入院時における患者背景因子や臨床データの関連性を明らかにし, 臨床応用可能な, 効果予測のための指標作成を行った.

【方法】1995 年から 2003 年に昭和大学第二内科に入院し, CRT を施行した食道癌患者 87 例を対象とし, それらの診療録より 42 項目の患者背景因子や臨床データを調査した. エンドポイントは効果の有無(CR/非 CR)とし, 関連する因子を単変量・多変量解析にて抽出した. さらに, 抽出した各因子とその寄与度を組み合わせ, 効果予測指数を算出し, 予測モデルを作成した.

【結果】対象患者は平均 63.5 歳, 男性 89.6%, 組織型は殆どが扁平上皮癌であった(97.7%). 多変量解析の結果, 食道癌患者における CRT 後の効果に独立して寄与する有意な因子は T 分類(オッズ比=0.151), 栄養状態(0.196), 総飲酒量(0.900)であった. これらの因子を組み合わせ, 効果予測指数を算出した. 式を以下に示す.

効果予測指数 = $2.238 - 1.890 \times T \text{ 分類} - 1.628 \times \text{栄養状態} - 0.106 \times \text{総飲酒量}$

T 分類(T1-3:0, T4:1), 栄養状態(常食:0, 流動食:1, IVH:2), 総飲酒量($\times 10^{-2}$ kg)

【考察】CRT 後の効果には, 入院時の腫瘍の進行状態, 栄養状態, 飲酒量が関与していることが分かった. この指標は効果予測のために有益であり, 臨床場面で治療法決定の指標となり得ると期待される.